

8

佐藤泰然一族とヘボン

高安 伸子

順天堂大学医学部医史学研究室

順天堂創始者である佐藤泰然（1804–1872）とヘボン（Hepburn, James Curtis 1815–1911）は、泰然が文久2（1862）年に横浜へ隠居した頃より様々な交流があった。泰然とヘボン、佐藤家の人々とヘボンとの交流については、過去に報告がなされており、演者も日本医史学会総会において報告した。¹⁾

泰然だけではなく、泰然の実子である松本良順（1832–1907）は歌舞伎役者三代目沢村田之助の主治医であったが、田之助が脱疽になり足を切断する折にヘボンに切断を依頼し、ヘボンが切断手術を行ったことは有名である。このような点から佐藤家とヘボンが非常に親密であったことがうかがわれる。

泰然の横浜での住まいはヘボンの施療所と近く、慶應元年の書簡には度々ヘボンの名前が見える。この頃、泰然の末子である信五郎（のちの外務大臣、林董 1850–1913）と佐藤尚中の長男佐藤百太郎（のちに貿易商となる 1853–1909）がヘボン塾に入塾し、ヘボン夫人から英語を学び始めた。順天堂史上巻に収録された慶應元（1865）年3月13日、佐藤泰然差出の佐藤尚中宛書簡によると信五郎と百太郎がヘボン塾でヘボン夫人に英語を習うだけでなく、ヘボン自身から直接、医学の手ほどきを受けることになっていると記される。

「……（略）……信五郎ハ小兒より妻教へかかり候事故 手すき出来申候ハハ医学はヘボン自から仕込具可申約束にござ候 百太郎も同様の事に可有之候……（後略）」

この日付の書簡には順天堂門人である三宅良斎（1817–1868）の名前も見える。

「良斎例の気性にてヘボンへ入塾為致候つもりなと申居候迎笑ひ居申候」

この記述から、泰然が門人たちに対してもヘボンが優れた医師であると述べていたことがわかる。

一方、ヘボンがアメリカ長老教会本部に書き送った手紙を集めた『ヘボン書簡集』にも、泰然の名前は出てこないものの老医師が施療所を訪れて医療や手術を見学して帰るとの記述が見える。

「気候が温暖になるにつれて、わたしの施療所の仕事もいそがしくなってきます。二、三人の若い医学生と一、二人の老人の医者が毎日わたしの施療所にきて、わたしのやる医療や手術を見学しております」

慶應元年4月25日 ヘボン書簡より抜粋

先に示した泰然の手紙とヘボンの手紙は、同じ慶應元年で日付も1ヶ月程度の差であるので、このヘボンの言う「老人の医者」が泰然であると考えられる。

泰然は明治5（1872）年4月10日に東京において死去したが、先に示した史料の他にも佐藤泰然と一族、および門人たちとヘボンが親しく交流していた事を示す書簡や回顧録（林董回顧録）が存在する。今回は、順天堂に残る泰然の手紙を主史料として佐藤家とヘボンがどのような交流を持っていたのかについて報告したい。

1) 第90回日本医史学会総会「ヘボンとの交流のあった人々」日本医史学雑誌 第35巻 第2号